

第一章 平等心より觀たる靈界の消息

五

また別の日の靈界通信、彼の手の自動書記は次のように綴った。

「わたしの親しき子よ——

「お前はまた、例の氣狂的現象がはじまるだろうかと思つて、溜息をついてお前の机に向かつている。わたしはもうここに来てゐる。お前は書かねばならないのだ。ほらお前は首をふった。がお前はこの手が何を書き出すだろうかと興味をもつて待つてゐる。

「実にただごとならぬ日のつづきだった。夢に夢みる心地なのも無理もない。しかし、お前は予想以上に無関心でわりあいのんきにしている。それも不思議ではない。なぜなら、わたしがお前を守っているからだ。お前はわたしの欲するようになる。お前が街へ出かけるときに、わたしはお前に随いてゆく。わたしはお前に暗示を与える、わたしはお前を机の前に坐らす、そして氣を静めさす。

「お前の聞いたところのことは神秘的な事実だ。しかし、まだそれはお前の心を完全に捉えてしまうことはできない。お前はそんなに無神論者なんだ。わたしがお前に神の祝福の微笑^{ほほえ}みのことを話したとき、お前の心臓はなるほどおののいたのであつた。しかしそれは 言葉どおりお前の心臓がいくぶんおののいたのであつて、それ以上のものではなかつた。

お前はまだ少しも、お前の経験した偉大な驚^{きょうげん}絶すべき摩訶不思議

議な現象の真相を理解してはいないのである。お前がそれを理解し、たましいの深いところで了解するようになるにはまだいくらかかかるであろう。しかしそれはそれとしておこ。なぜならわたしはお前に話さねばならぬことがたくさんあり、われわれは仕事にとりかからなければならぬからである。……

「あまりに深く考えすぎるな。そして、わたしの邪魔をしてくれるな。わたしはお前の疑問をすべて知つてゐる。その疑問は、適当な時期が来たときに順次にみんな答えるであろう。わたしは何ものも忘れはしない。わたしは絶対に確実な心性機関を備へてゐる。何ものもわれわれの記憶から消滅するものはないのである。一つの疑問に解答すべき適当な時期が来たときには、わたしはその疑問をお前の意識の表面に浮かびあがらせるだけである。

「われわれスピリットの力の偉大さよ。いまお前は聴かねばならぬ。しかし、忍耐して待て。われわれはまだ長時間仕事をしなければならぬのである。

「まず第一に、わたしはお前に告げる——テーブルの傾斜現象は真実である。わたしはお前の顔を、お前の思想を読む。お前はこの現象にわれわれがたずさわることを実に恥ずかしいことだと思つてゐる。それはお前がこの現象の眞實性を信じないからである。……

「テーブルは踊る！ そうだ。それはできるのだ。お前はそれを見、それを自分自身で體驗した。テーブルを動かすのは人間の靈魂^{スピリット}だ。いな、わが伴侶よ、今は、わたしはそれをやらない。だがしばらく我慢してくれ。テーブルを動かすのは靈魂^{スピリット}であつて、人体磁氣でも、潜在意識でも、筋肉のはたらきでもない。それは、科学が賢くも研究してさぐり出したところのどんな他の力でもない。

お前にテーブルを通じて話したのは死者の霊だ。それは遊戯だ。不可解の遊戯だ。だからそれはなすことを許されるのだ。

「やがて人間は、われわれ靈魂たちが肉体の死後生きており、幸福であることを知らされるようになるだろう。人間が数人あつまつて、一つのテーブルを取り巻く、そして両手をその上に置く。するとテーブルが傾き出して、その脚がゴソゴソ音を立てる。これは靈魂が来て人間に話しかけるのだ。この現象の眞実性をお前に信ぜしめることは、今はまだ困難なように感じる。しかしお前が、わたしがお前に話さねばならぬだけをいっさい聴いてしまつたなら、テーブル傾斜現象がたいした現象ではないが、自然な現象であることを悟ると思う。」

「テーブル傾斜を實驗してみても、現象が起こらないことは度々ある。ある人はテーブル傾斜現象を起こす者を愚劣な馬鹿者だと考えているし、またある人はそれを見する機会がないがために、そんなことは事実起こらないものであると考えている。しかしこの現象はみんな説明しうることなのだ。やがて、何もかもお前に説明するだろう。しかし、幾千という疑問を一度に出してわしを悩ましてくれるな。わしがすべての疑問にすぐ答えようとすれば、その説明が明瞭を欠くことになるからだ。……

「人間はやがて、神の活在了たまつことを知るようになるだろう。そしてわれわれ靈魂も生きており、われわれと話を交えることができるということも知るようになるだろう。」

「なぜ地上の人間が幾十世紀の間も、靈魂の死後存続ということについて知らされていなかったかという問題を、多くの人々は提出するが、この疑問に、君たちが理解しうる限りできるだけ明瞭に答えよう。地上の生活の眞意義は生活することであつて、この

生活を捨てることではない。地上の人間は生に執着し、死を厭う。死は生の抹殺であるからだ。……

「人間は人間であつて、生きられる限り地上で生きねばならない。なぜなら、人間の生活は地上のそれであつて、そのほかのものでありえぬのだ。生には法則があり、世界にも法則があり、それは変えることのできないものだ。というのはこの法則は神の掟給えるものだからだ。人間は人生に生活し、摇篮に始まつて墓に終わるまでの間苦しむ。今までかくのごとくありしごとく、これから常にならざるであらう。太陽は昇り、太陽は没する。日光は輝き、心臓は顫える。数千年このかた、人間は生命と人間自身と、光とこの世界と、それから理解しうるあらゆる事物とを研究してきた。人間は生命の法則、地球の軌道、遊星の運動、植物や動物の生命を研究して知つたのである。無限時間を通じて、すべてこれらのことは不変であつた。人間は地上の帝王となり、彼は地的なあらゆる事物を予告することもできるようになっている。いつこの病人は死ぬか、また生理的になぜ死ぬかをも知っている。人間は、地上に群がるいっさいの事物を了解することができたのである。ただ知らないのは『死』とは何か？ 『生』の前に何かあるか？ 『死』の後に何かあるかということだけだ。これは本来人間のかかり知る部分ではなく神の領域である。これらのことは人間には了解を絶した事柄であるから、人間から観れば神秘に見えるのだ、わたしが内々お前にこれから話そうとするこれらの問題を、お前は眞には決して理解することはできないであらう。お前はわたしの言葉を説明するために、お前の人間的な知恵を使うだろう。そして疑問が起こるだろう。なぜならお前は人間であつて、地上世界の法則によつて生きてゐるからだ。お前は地上に

生をうけたところの『生命』であつて『地上』の法則に支配されている。お前の理解しうることはこの地上の法則にかなうことだけであつて、この法則以外の法則に支配されている事柄を決して知ることはできないのだ。人間は『神』を真には理解することはできぬ。なぜなら人間は完全円満をつかみえぬからだ。もし『完全円満』に達しえたならば、人間はもう人間ではないであらう。人生は過去のごとく今もあり、永劫えいこくを通じてそうであつて決して異なるものとはならないであらう。

(著者注) ここに書かれている「人間」とは肉体人間のことであつて実相人間のことではない。

第四章 幽明の境を超える念の感応

達者であつたのに急に脳膜炎にかかつて重態になりました。医師も、もう医療ではむづかしいから「覚悟をして神さまを拜むなり、信心するなりなんなとしてくれ」といいますから、もう一度神様のお力で今度だけは救けていただきたいと申して来られたのであります。それでこちらからも神に祈つて遠隔治療し、安達夫人にも病児の枕頭で熱心に神想観をしていただくことにしました。ところが、その病児が、もう駄目というところまでいつて、急に生き返つたのです。心の世界ですでにその子の死のフィルムができ上がつていて、九分九厘まで現実界に映写うつし出されたのであります。それが神の強烈な修正の念波で修正されたので、再び生き返つたとより解することはできません。しかし、神による運命の修正は必ず有るとは定きまっています。本人の靈魂、周囲の人たちの靈魂の向上にその方が善いという見きわめがついた場合に、神の修正が加えられるので、自分が不思議に治つたら「アノ人も

治してやってくれ、アノ人も治してやってくれ」といって知人の病人の名前をみんないって来られる方がありますが、そんなに無闇に神の修正の手は加えられるものではないので、病気の本人にしても、その時治る方がその人の靈魂の救いになるか、その時靈界に移転してしまう方がその人の靈魂の救いになるかは、神様がチャンと見透した上で修正の念波が送られるわけで、わがまま勝手な願いがすべて通るというわけではないのであります。

仮に何も無いように見えるエーテルという仮想的マテリアルをあると考えているのですが、本当をいえば、念がなければ物質の最後の単位たるエーテルも何も無い。念が起れば念相應の現われが現象界にできるので。こつこつと、物質は無いので、念がなければエーテルさえも無いのです。エーテルさえも否定してしまわないと、根本的に物質を否定したことはならないのです。

ところで、ここにこうあらわれている火鉢というものを観えますと、これがなかなか「念」の反影であつて本来存在しない影のような蜃気楼のような存在だとは思われないう。それはわれわれの念が、「物質はある」「陶器はある」「粘土はある」として観るからあるのですが、われわれと異なる念をもっている人には「無い」と感じられたり、影のような透過自在な存在だと感じられるのです。先刻話さつきの出ました青島チンタオの靈媒、藤倉夫人は物質を透過することができる靈媒であつて針金で固く縛つておいても、その針金をほどかないでそのままその肉体を針金から脱け出すことができます。ほかにも高知の靈媒北村延栄氏や、東京のある靈媒のような、密閉室内へ物を持ち込んだり、縄で完全に縛られたま

ま一番下の襦袢^{じゅばん}だけを脱いだり裏返しに着たりすることが出来る霊媒があります。なぜこんな物質の不可入性を打ち破ったような実験ができるかと申しますと、物質はこれを固いと思う念をもっている人には固いし、物質は存在しない、影みたいなものだと思っっている人にはそういうようにしか感じられないのです。これらの霊媒にはいずれも霊界の靈魂^{たま}がついていて人間を操縦している。それらの靈魂は現実界とは異^{ちが}う念をもっているから、われわれが固いと思うものでも、スーツと透過してしまう。その念で物質を取り扱うから、物質の不可入性が打ち破られてしまうのです。昔から幽霊が密閉しておいた部屋の中へでも這^{はい}入って来るのは周知の事実ですが、それが出来るのは靈魂はわれわれとは念の異^{ちが}う世界に棲んでいるからです。この火鉢が固いというのはなんの根拠もない、靈魂ならスーツと火鉢を透過できる。理論上から考えても、火鉢を構成している分子と分子は、その大いさ^{おお}の比較からいえば天体と天体ほどの距離があいていて、その空間に分子の小粒子が浮いているのだから固いというはずがない。ただ固いと感じる念の作用で固く感じて何も無い空間を突き貫くことができないのです。また分子と分子との間を埋めているエーテルという材質を仮想しても、エーテルとはなんらの抵抗もない存在であるから、こうしてわれわれは空間に手を振ってみても少しも抵抗を感じない。そうすれば、分子と分子との間にあるエーテルでも、なんらの抵抗なしに自由にわれわれの圧迫の前に陥没^{かんぼつ}しなければならなけれども、なかなかこうして押してみると手ごたえがする。本来抵抗の無いところのエーテルに抵抗を感じてわれわれはそれを突き貫くことができない。ところが誰でも突き貫くことができないかという、同じ肉体でも、ある念を作用すると、藤倉夫人の

ように、北村霊媒のように突き貫くことができる。すると、物質が固い存在だということはあらゆる場合には通用しない。固いという念をもっている人には固いし、そうでない人にはそうではない、要するに心の影だということになります。「物質は無」だということとは、理論上ではまあこれぐらいにしか説明ができませんが、たいいていこれぐらいで納得できると思います。

生命の真相 谷口雅春 日本教分社